
10年後の・・

榛原藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10年後の・・・

【Nコード】

N3510I

【作者名】

榛原藍

【あらすじ】

コナン小説集ということ、原作改変オリジナルであったり、完全オリジナルであったり。そんな作者の妄想を取り込んだコ哀・新志な小説集です。

（前書き）

一応読みきりです。皆さんの反応で続けたいと思います。

皆さん、僕のことは知ってらっしゃいますよね？円谷光彦です。

僕らはこの春、高校2年生になりました！僕は名門校に行けと両親に言われていたのだけれど、僕はそれを断り、ここ帝丹高校に去年入学しました。理由はもちろん、友達のためです。幼稚園のころからの友達の小嶋元太君。昔からの食いしん坊です。でも、彼のお気楽なところや、常識にとらわれない発想は変な意味ですが尊敬しています！そして同じく幼稚園のころからの友達、吉田歩美ちゃん。

実は、ずっと好きでした！元気がよくって、可愛くて。それは今も変わりません。小学校からの友達、江戸川コナン君。推理力、行動力、運動神経、ルックス・・・正直、羨ましいくらい完璧な人です。歩美ちゃんは彼のが好きで、嫉妬もしていたのですが、彼はいざというときすごい頼りになって、尊敬している人物です。そして同じく小学校からの友達の灰原哀さん。頭脳明晰で、博学多才でミステリアスで、大人の雰囲気が出て・・・憧れの女性でした。最初はツンツンしてて、好きになれそうになかったのですが、いつの間にか気になっていて、二股みたいで嫌だなあって思っていました。でも、そんな彼女も、素直じゃないからあまり表に出しません、コナン君のことが好きだとわかり、またも嫉妬してしまいました。

そんなみんなと離れたくなくて、僕はみんなと同じ高校に進学しました。これは、僕たちが高校性になって2年目のお話です・・・。

4月8日、帝丹高校始業式から数時間後・・・。

「また一緒ですねえ、元太君、歩美ちゃん！」

「おう！腐れ縁だなあ、光彦！」

「なんかもう、先生に仕組まれてるみたいだね」

3人の元気の良い声が、教室に響く。それもそのはず、元少年探偵団の面々は、まるで神様の悪戯かと思うほどに、小学校から高校

まで同じクラスだった。

「あれ、コナンと灰原がいねえなあ」

がっしりした体形になった元太が、キョロキョロと辺りを見回す。

「また事件じゃない？ 去年も遅刻とか欠席多かつたし」

「去年はあの2人、出席日数ギリギリでしたからね・・・」

高校に上がってすぐ、コナンは時々高校生探偵として活動していた。哀も、想いからなのか、自ら助手を引き受け、コナンと行動を共にしている。授業を受ける回数は元太たちよりはるかに少ないのに、成績はダブルトップという並はずれた記録を残している。

「最近じゃあ、【工藤新一の再来】って呼ばれてますもんね、コナン君」

「ああ、そーいや新聞の一面になってたなあ」

元太が思いたすようにして言った。

「でも、だからって新学期初日から休むなんてねえ」

歩美が呆れたように言う。

「今日はもう休みじゃねーか？ あいつら。もうすぐ終わっちまうぜ？」

と、元太が言った瞬間、教室のドアを噂の2人が通り抜けてきた。既に眼鏡を外し、身長も高くなったコナンと、変わらない雰囲気を漂わせいる哀。

「よお、おめーら。また同じクラスだな」

ふぁ・・・とあくびをしながらコナンが言う。その後ろでは、同様に哀もあくびをしていた。

「おう、もう腐れ縁だな」

元太がコナンに笑いかける。

「ホント、学校側が裏から手をまわしてるって感じよね・・・」
眠そうに、哀が言った。

「2人とも、どうしたんですか？ ずいぶん眠そうですけど」

「寝不足？」

光彦と歩美が、心配そうに声をかけた。

「ああ・・・まあ・・・うん、昨日、アメリカから返ってきたばつかだよオ・・・」

うんつとコナンが伸びをする。

「アメリカあ!？」

元太の素っ頓狂な声が響いた。それで、話に夢中だった周りの生徒がコナンと哀の登校に気付く。

「灰原さんも？」

「ええ、仕方ないでしょ？私は彼の相棒だから」

ねえ？と哀が確認するようにコナンを見ると、コナンはまあな、と答えて見せた。

「助手じゃなくて、相棒？」

「そう、助手なんかよりも親密な・・・ね？」

「変な言い方よせよ、誤解招くから」

そう言うコナンの後ろから、男子生徒達が現れる。

「よっ！夫婦そろって海外旅行の次は登校・・・バラ色人生だねえ」
なんとなく、10年前にこの学年だった連中に似ている気がする。
「うっせーっての！海外旅行じゃなくて事件だ事件！依頼が来たんだよ！」

鬱陶しそうにするコナンの横で、哀がクスリと笑った。

「ねえ、哀ちゃん。事件が終わったんなら、しばらくは学校来れるんだよね？」

歩美が哀の顔を覗き込むようにして言った。

「さあ、どうかしら。それは彼の気分次第じゃない？」

哀は歩美に微笑みかけると、私の席はどこ？と尋ねた。

「ほんで？探偵クラブの方はどうなんだ？」

コナンが元太に尋ねた。

「おう、お前が事件解決して新聞に乗ってくれたおかげで、オレ達探偵クラブも人気急上昇！遺失物届より先に俺たちのところへ依頼してくるようになって、まだ手をつけてない依頼もたくさんあるぜ」
「へえ、よかったじゃねえか。今までまともに活動できてなかった

もんな」

「そういえばコナン君、今すごい人気みたいですネ。“工藤新一の再来”って呼ばれてるんでしょう?」

光彦がコナンに詰め寄る。

(その工藤新一が、江戸川君なのにね)

クスリと哀が小さく笑った。

「あ? ああ、まあな」

どちらか自分を指す単語なのでどちらを誇ることもできず、曖昧に頷いた。そこでチャイムが鳴り、休憩時間の終了を告げ、瞬く間に時は流れて放課後になった。

「久しぶりだね、哀ちゃんとかうして歩くの」

イチヨウの並木道を歩きながら歩美が言った。

「そうね、春休みを挟んで、その前は事件事件で、最後はかなり前になるわね」

哀も懐かしそうに天を仰ぐ。しかしその視線は、少し前を同様に歩くいつもの3人の中の1人に注がれている。歩美はその視線を追うと、残念そうな表情になった。

「哀ちゃんはいいいねえ」

「え?」

ポカンとした表情を歩美に向ける。

「だって、いつもコナン君と一緒にいられるんだもん」

なんだそんな理由か、と哀はほつと息を吐いた。

「一緒って言っても、所詮は事件が絡んでの関係よ? あなたが想像しているような、ロマンチックな関係じゃないから。気にしないでくれる?」

10年前、見知らぬ館に泊まることになったときのように、哀があしらう。

「それでも羨ましいよ。哀ちゃんが」

刺すような視線を、横顔に感じた。

「良い機会じゃない」

唐突に、哀が口を開いた。

「え？」

「彼、アメリカでの事件で疲れ切ってるから、しばらくはココに留まろうとするはずよ。その間に、告白なり何なりした方がいいと思うわ。これを逃せば、またどうなるかわからないんだもの」

哀がにっこりとほほ笑んだ。

「・・・いいの？」

「なにが？」

「コナン君に告白しちゃっても」

「っ・・・別に構わないわ」

一瞬哀が息をのむのを、歩美の耳は聞いていた。すると、歩美は突然にここにこ・・・ニヤニヤと笑いはじめた。

「・・・なに？」

「やつぱり嫌なんだね」

「ッ」

わかりやすくなった。そう、歩美は思うのだ。10年前のポーカ―フェイスと違い、徐々に表情豊かになってきている哀に、良い傾向だと。

「・・・どうやら、隠し通せなさそうね」

やれやれとでも言いたげに、ため息をつく。

「隠し通せると思ったの？小学校の時からなんとなく気付いてたけど」

瞬間、哀は目を見開いてカーツと頬が夕陽色に染まっていった。

「おい、灰原。目暮警部から連絡来たから、行くぞ」

だるそうにコナンが哀に言った。

「えっ、ええ」

頬を染める赤は、夕陽のおかげで目立たなかった。

「コナン！灰原！がんばれよ！」

「明日はちゃんと定刻に学校へ来るんですよ！」

「またね哀ちゃん！コナン君！」

背後からする声に、コナンは振り向き、笑顔をたたえる。

「おう！また明日な！」

ここでの別れを境に、自分たちは江戸川コナンと灰原哀ではなく、工藤新一と宮野志保の関係になる。そんなことを思いながら、哀はかつて、太陽の断末魔と比喻した夕日を眺めた。

（後書き）

コ哀or新志で短編・中篇・長編に挑戦します。ご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3510i/>

10年後の・・・

2010年10月8日15時26分発行